

過ぎたころより共產教育が始まり、若い者たち五十人ばかりが作業にも出ずに若干の報酬をもらって勉強していたようであった。

一応我々も皆、共產グループに入ってナホトカで乗船するまでは労働歌を歌ってソ連に敬意を表してきたわけであるが、日本の船に乗ってからは実に静かなものであった。

時に昭和二十三年七月二十三日でした。

シベリア回顧

島根県 多賀 穎秀

寒さに寝つかれない収容所の第一夜が明け、昭和二十一年十一月三日の朝を迎えた。昨日の夕方、湖岸の長い土堤を歩いて来て、この粗末な建物に収容されたのだが、今朝見れば前の湖水は一夜にして固い氷にとざされている。この建物は流刑者を収容するために建てられたものだそうで、二か所に望楼が建ち、銃を持った兵士がいつ

も監視している。この寒々とした収容所にいつまでおらねばならぬだろうかと思うと身が凍る思いだった。

思えば九月十八日に奉天で列車に乗り込んでから黒龍江を渡り、バイカル湖の岬を通り、シベリア鉄道のノボシビスクから分かれて南下し、実に四十六日に貨物列車からおり立ったのがこのカラカンダの地であった。

うず高い古鉄の山が延々と続く中を通り抜け人造湖の長い堤防の上を進んで行くと、湖水のはるかかなたの丘陵のふもとに平たい白壁の建物が立ち並んでいるのが望まれた。これが我らを収容するための第十八ラーゲルだったのである。一体何の目的でこんな遠いところまで連れて来たのか見当がつかなかったが、やがて数日たってから本格的なラポーターが始まり、やっとわかった。

それはこの間来るときに見た膨大な古鉄を精練する製鉄工場を増設するために我らを使役しようとするものであったのだ。それからは毎日昼食用の三百グラムの黒パンを腰に下げ凍った湖水の水を転びつまろびつ長蛇の列をつくって作業場へ通うのだった。

作業は種々の雑役だったが、何としても零下数十度の

寒さの中から仕事の能率が上がらない。能率が上がらないから給与の食糧もなく、寒さに震えながら時間稼ぎをするばかりだった。昼の休みになって持ってきたパンを食べようとすると、れんがのように固く凍って歯が立たない。そこで飯ごうに入れたき火のそばでしばらく温めてから食べることにしたが、この黒パンたるや初めはまずくていただけのものではなかったが、空腹のため後にはカステラのようにおいしい気がするようになった。

伝染病

四月になると凍っていた湖水もそろそろ解け始め、そこはかとなく春の気配が感ぜられ、やっと寒さから解放されることとなった。しかし、依然として食事の給与が少ないので、ひもじさには変わりなかった。八月になってから病人が続出するようになった。同僚の室園真二君が体調が悪くて食事が進まないと言うので、おかゆの残りをもらってちょうだいしたが、彼はやがて入院し、そのままついに会うことはなかった。数日たってから私もまた下痢を起こし、発熱し、入院することとなった。先に入院した室園君は腸チフスだったのだ。彼の残

飯をいただいたので、自分にも感染したらしい。

昭和二十一年八月十五日、悪寒のため寝台に寝ている体が激しく震えるので、マラリヤにかかったかと思っていたが、やはり腸チフスだった。腸が敗れたのか物すごく多量の血便が出、衰弱がひどいので、これではとうてい助かるまいと思った。隔離病舎の個室でただ一人寝台に横たわって、寂しく思いめぐらした。

祖国は今お盆である。自分が死んだことがいつの日か父母や妻子に伝えられるだろう。そのとき、どこでどういう死に方をしたやらと思って、定めし悲しむことだろうと思うと悲しみが心の底からこみ上げて、何とも形容しがたい悲痛な思いに嗚咽がとまらなかった。そしてそのまま昏睡状態に陥ったらしい。

翌朝広瀬軍医大尉に起こされ、「お前はお坊さんか」と問われ、「ハイ、そうであります」と答えると、「だから昨夜はナンマンダ仏ばっかり言っとったナ」と言われたが、回診されたことも注射を打たれたことも全くわからなかった。幸い一命をとりとめて、病気は次第に快方に向かっていたが、スパースクの病院へトラックに揺られ

ながら転送された。

この病院には大勢の患者が入院しており、ドイツ人のドクトルが何人もいて丁寧に診察、治療してくれた。ここにいること数日にして、今度は第八ラーゲルの病室へ転送された。ここは収容所の一隅に建てられた病舎で、ドイツ人のドクトル一人と数人の看護士がおり、二十人くらいの患者と一緒に板の間の一室に布団を敷いて、寝たり起きたりしていた。病気はすっかりよくなっていて、薬は出ず、十月十八日に六十七日ぶりに病舎を出て、こここの収容所の第三中隊へ編入されることになった。

入 坑

この第八収容所は最初の十八ラーゲルよりはるかに大きく、藤部隊の約千二百人が収容されていた。同町出身の近江紀成、山根弘康君など知っている人も多く、実現に懐かしかった。全員が三交替で炭坑の作業に従事しており、私も入坑することになった。炭坑というところがどんなところか全く予備知識なしで入ったが、日本の炭坑はこんなものではなかうと思うほどお粗末で、長い

斜坑を歩いておけると、水がしみ出るところがあるので、用心せねば足を滑らせるし、病み上がりで弱っている身には全く地獄へ行くように恐ろしくて暗い気持ちだった。ハラーゲルには三坑あったが、このガルバチョウの炭坑は特別にお粗末だったようだが、後にはなれて寒い地上の作業より坑内が暖かくてよいとさえ思われた。

この炭坑へ帰還の日まで毎日入坑したが、二度ほど生死にかかわる危険な目に遭ったけれども、幸い大した怪我もなく済んだことはありがたいことだった。

壁新聞

二十二年の三月ごろから食堂の壁に手づくりの新聞のようなものが張り出されるようになった。それに鳥取県出身の三中隊長高田少尉が歌壇を設け、題を出して短歌を募集し、みずから選者となり寸評を加えたものが掲載されるようになった。単調で無聊な炭坑生活に一抹の潤いを与えるもので、取り替えの日を待ちかね、興味深く読んだ。何回目だったか「たらちね」という題が出たとき、天位になった人の歌に

初のもの蔭のとうあえて陰せんに

涙す母のありありと見ゆ

とあるのを見て深く心を打たれ、今でも忘れることができない。私が出した歌は

たらちねの母な憂いそ健やかに

我生きてありとつ国の涯

というのだったが、これは八位に入選した。この壁新聞に随感断想と称して何回か随筆を投稿したが、幸い毎回掲載してくれたのはうれしかった。読む物が何もない無味乾燥な収容所の生活で字に飢えており、壁に張られたこの一枚の張り紙の前に立ちどまって、いろいろなことを思いながら食っているように貪り読むのだった。

シベリアの飢えも寒さも懐かしき

我老いぬれば恨みうすれて

カラカンダでの抑留生活

島根県 山本 久夫

四平街での終戦―そしてシベリアへ

昭和二十年八月初旬。ソ連軍がソ満国境を越え南下進撃してくるとの情報を聞いたのは、私たちの通称藤六八六五部隊が湖北省当陽県から一か月半に及ぶ夜間強行軍を経て、満洲四平街に入って間もなくのことである。

満二十二歳を迎えた私はこの四平街で陸軍少尉に任官し、第一小隊長として初年兵教育に当たっていた。初年兵といってもどこからどうして集まって来たのか、四十歳を超えた初老に近い召集補充兵である。携帯しているものは三八式歩兵銃はなく、中身は竹製か何かわからぬ帯剣（ゴボウ剣）と一―二個の手りゅう弾（一個は自決用）と背のうだけで、かつての関東軍の面影はなかった。

全く覇気の見えないこの貧弱な恰好の兵士集団は、軍事訓練を十分受けた私の目には不吉な敗戦を予測させるものであった。訓練は、集めたサイダー瓶などの中に、ガソリンを詰めた即席手製の火炎瓶を右手にほく前進し、ソ連軍戦車に接近し、その銃口に投げつけるという対戦車肉薄攻撃訓練である。また、毎日さん壕（たこ壺）を掘ったり、各目の頭髮や爪を切って遺品とするなど、まことに非実戦的な訓練だったと思う。